景観要因の心理的考察

—Psychological Approach to Factors of Twnscape—

藤　浦　鋭　夫

I　はじめに

本研究に使用した京都市・金沢市のスライドフィルムは，昭和56年から58年にかけて行った「景観要因の美学的考察　1・2」[注1]の研究に用意されたものを使用した。

両都市の選定にあたっては，前稿の中にも述べてあるが，他の都市と比べ，固有の歴史的風土に培われた，より多くの手掛りとなるものを内在しているという判断によって，この両都市を選んだものである。その選んだコースは，京都らしさ，金沢らしさが適当に折り込まれるように配慮した結果，ほとんど観光コースと重った。

スライドフィルムの撮影には，京都においては都市の規模も大きく，範囲も広いので，その移動には車を利用し，金沢では徒歩によった。またその撮影には交差点や曲がり角，変わった建物など，景観の要因が変化したと思われる地点において，自然の写角によったものである。また前回の研究は，都市景観の美学的諸問題を取り上げたものであるが，今回は，心理学的尺度構成法によってイメージを量的に把握し，次に多変量解析を行い，都市構造の認知に関する，心理的要因を探ろうとしたものである。

II　分析の方法

II－1　スライドフィルムの選定

景観研究の効率化を図るためには，屋外景観を何らかの方法で研究室内に再現しなければならない。その方法には，Sequence 景観として16㎜やＶＴＲによる動画面もあるが，本実験では，スライドフィルムによる静画面を映写し，その評価を行った。

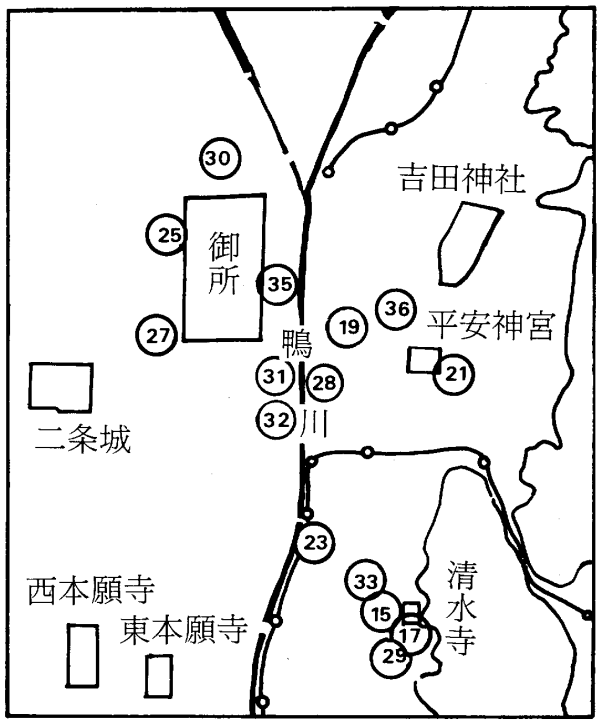
前回の調査では，その対象となったフィルムの枚数は507枚，それを学生30名により「美しい」「美しくない」「どちらでもない」の三段階順序尺度評価によって，それぞれ73枚，48枚，386枚を大別した。今回はそのうち「美しい」「美しくない」のフィルムを使用した。この両極の評価は，心理学的要因を探る上で，よりよく評価特性を示してくれるであろうという判断からである。この両極のフィルム合計121枚をランダムに配列したフィルムケースの中から，３枚毎に１枚を順に抜き取り，40枚のフィルムを選定した。選定地点は，京都御所，木屋町通り，四条大橋，八坂神社，清水寺のそれぞれの附近，金沢では卯辰山山麓，中央武家屋敷コース，寺町台見てあるきコースにまたがり，京都15枚，金沢25枚となった。

尚撮影期日は昭和56年11月下旬から12月下旬，晴天の日の午前10時から午後３時までの時間帯を選んで撮影した。

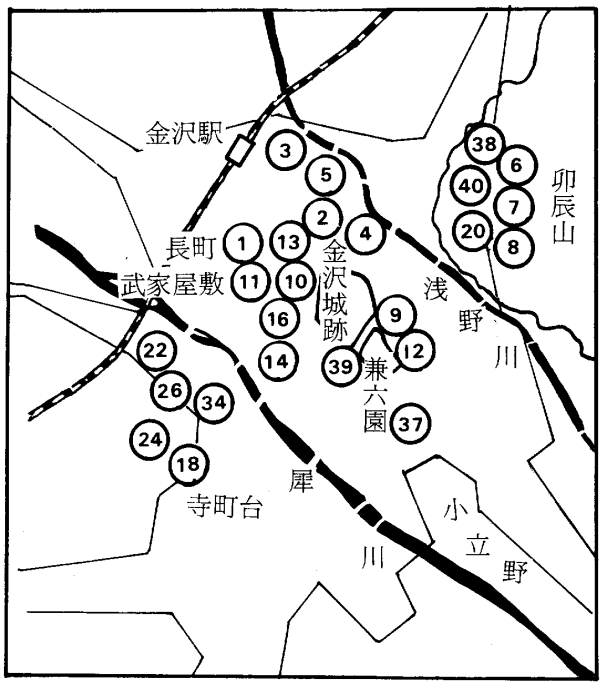
II－2　スライドフィルムの分析

40枚のスライドフィルムを映写し，１枚毎の12カテゴリーについて，62人の学生を対象とした，ＳＤ法[注2]によって尺度評定を行った。修飾語・形容詞群は次の12項目を適当として選んだ。１「新しい－古い」，２「うっとうしい－すがすがしい」，３「のびのびした－きゅうくつな」，４「珍らしい－ありふれた」，５「開放された－閉さ的な」，６「落つかない－落ついた」，７「静かな－さわがしい」，８「変化のある－単調な」，９「やぼったい－洗練された」，10「親しみやすい－親しみにくい」，11「雑然とした－整然とした」，12「しぶい－はなやかな」

フィルムの映写時間は３秒間，インターバル５秒，５段階の順序尺度記入法で行い，29760個（40×12×62）のデーターを得，480個（40×12）の平均値によって因子分析を行った。



図－1　京都市資料に選ばれた地点15ヶ所



図－2　金沢市資料に選ばれた地点25ヶ所

表－1　資料地点とフィルム番号（京都）

御　所　附　近	25、27、30、35
平安神宮附近	19、21、36
清水寺、祇園附近	15、17、23、25、33
四条大橋附近	28、31、32

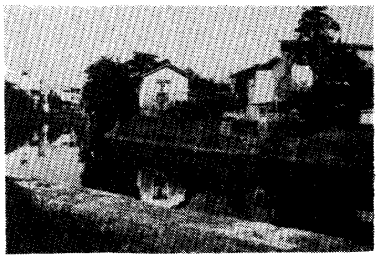
表－2　資料地点とフィルム番号（金沢）

卯辰山麓、浅野川畔	2、3、4、5、6、7、8、20、38、40
長町武家屋敷附近	1、10、11、13、14、16
金沢城跡附近	9、12、37、39
寺町台附近	18、22、24、26、34

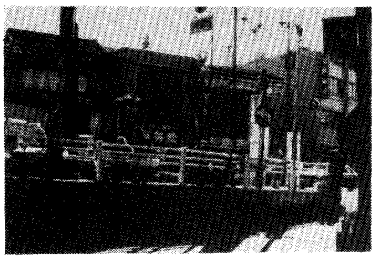
写真－1　京都観光コース15枚 金沢城下町見てあるきコース25枚のスライドフィルム

1　金沢武家屋敷

2　金沢尾張町裏

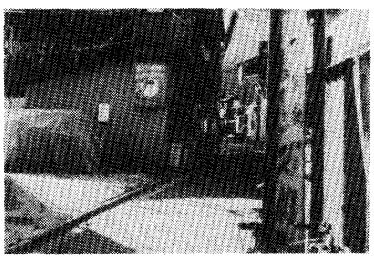


3　金沢浅野川畔



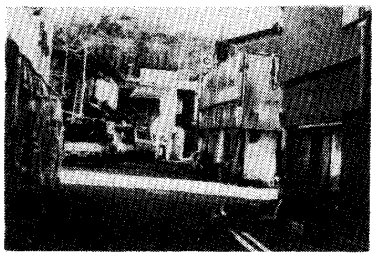
4　金沢橋場町

5　金沢主計町



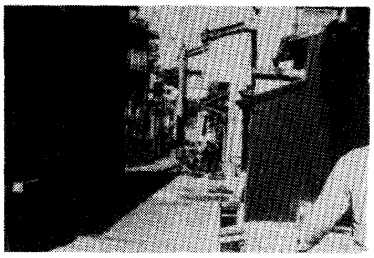
6　卯辰山山麓

7　金沢 うたつ山コース

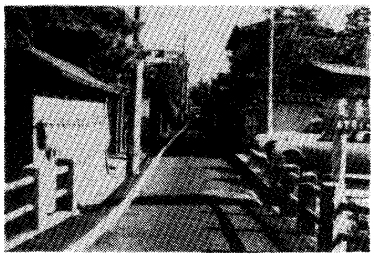


8　金沢 うたつ山コース

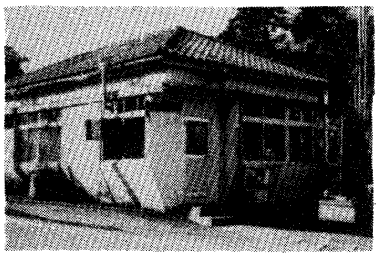
9　金沢兼六園入口



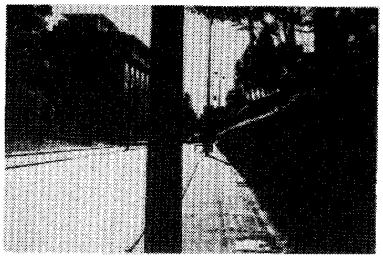
10　金沢 尾山町裏



11　金沢 武家屋敷

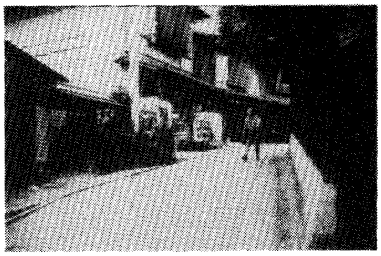


12　金沢 兼六園入口

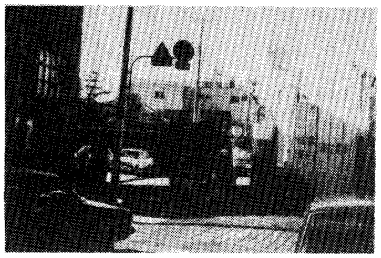


13　金沢 中央コース

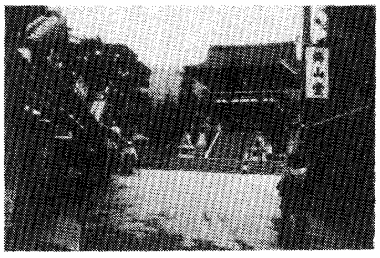
14　金沢 香林坊裏



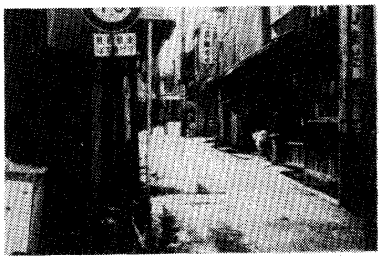
15　京都 三　年　坂



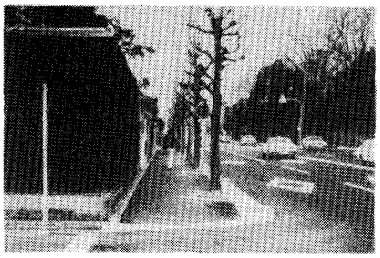
16　金 沢 コ ー ス



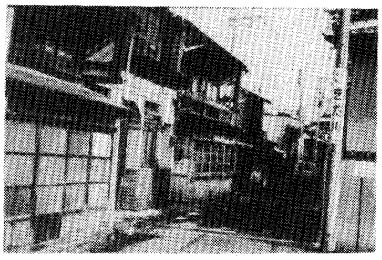
17　京都 清　水　寺



18　金沢 寺町コース

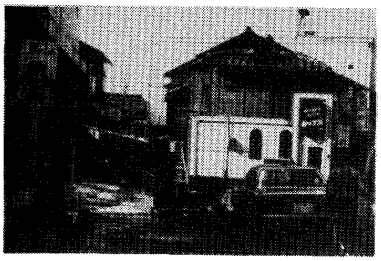


19　京都 御所の近く



20　金沢 うたつ山コース

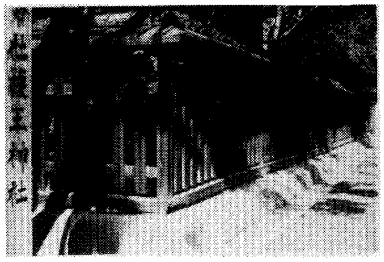
21　京都 南禅寺の近く



22　金沢 千　日　町

23　京都 祇　　園

24　金沢 寺町コース

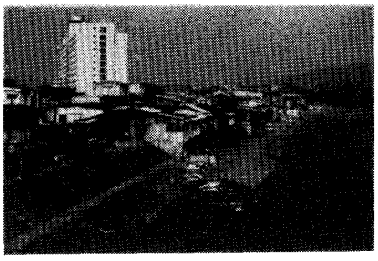


25　京都 護王神社

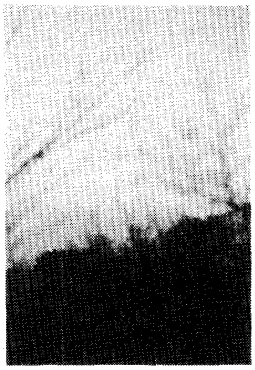
26　金沢 寺町コース

京都
道路

27



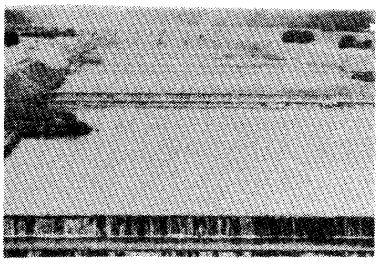
28　京都 四条大橋



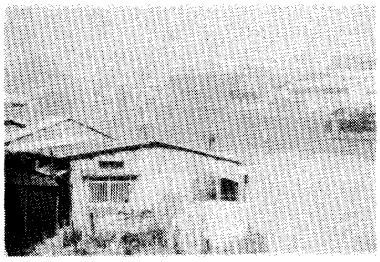
京都
清水
寺

29

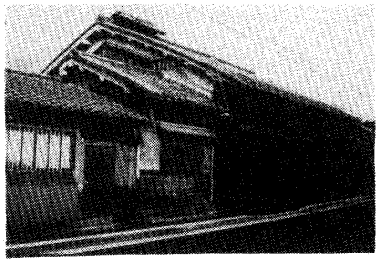
30　京都 御所の近く



31　京都 四条大橋



32　京都 四条大橋

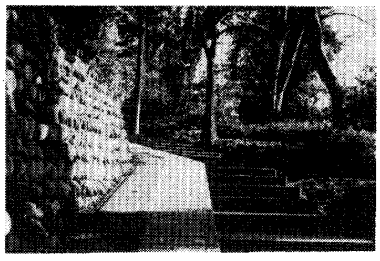


33　京都 祇　　園

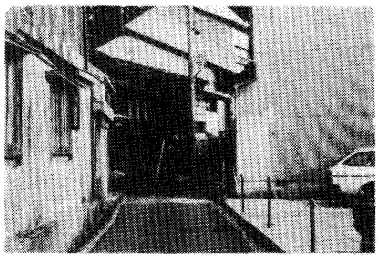
34　金沢 寺町コース

35　京都 東　大　路

36　京都 東　大　路

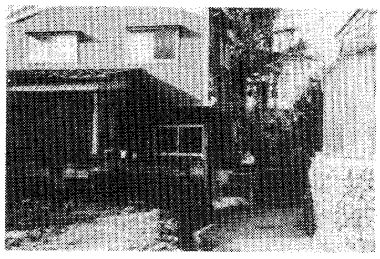


37　金沢 本多町坂



38　金沢 うたつ山コース

39　金沢 兼六園より
城



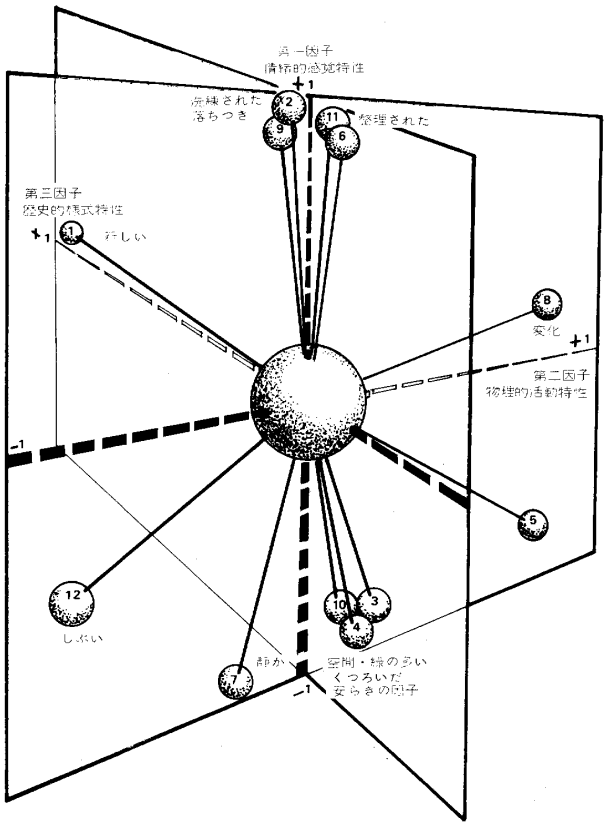
40　金沢 うたつ山コース

表－3　　実験及びその被験者

被験者	年令　21～25	男　41人	女　21人
実　験	スライド・フィルム　3秒間呈示 カテゴリ別　5段階に○印 その間　5秒		

表－4　因子負荷量表

		第一因子	第二因子	第三因子
1	新しい　－　古い	−0.07	0.13	0.98
2	うっとうしい　－　すがすがしい	0.96	−0.11	−0.03
3	のびのびした　－　きゅうくつな	−0.87	0.22	0.02
4	珍らしい　－　ありふれた	−0.84	0.12	−0.06
5	開放された　－　閉さ的な	−0.60	0.66	−0.15
6	落つかない　－　落ついた	0.90	0.13	0.07
7	静かな　－　さわがしい	−0.87	−0.39	−0.02
8	変化のある　－　単調な	0.26	0.85	−0.01
9	やぼったい　－　洗練された	0.91	−0.14	−0.03
10	親しみやすい　－　親しみにくい	−0.71	0.08	0.04
11	雑然とした　－　整然とした	0.94	−0.05	−0.00
12	しぶい　－　はなやかな	−0.52	−0.74	0.06
	累積寄与率	56.5%	73.3%	81.7%



図－3　第一第二第三因子による空間配置図

II－3　因子分析

一般に人間の，あらゆるものを評価する行為は，複雑でその反応も多様である。ある特定の場面における多くの人間の行動を詳細に分析して見ると，一見ランダムに起る様に見えるものでも，そこには何らかの規則性が見られるのが普通である。因子分析は，そのようなさまざまな事象間相互の関連の強さを分析し，それらの事象の背後に潜む，共通の因子をさぐる統計的手法である。

今回の調査対象とした両都市は，歴史的伝統に培われた遺構を混在しており，またその土地固有の街並を醸し出している。また都市としての規模は異なるが両都市とも観光的性格を持っており，今後都市造りの中で，景観認知にかかわる心理的要因の解明は，欠くことの出来ない問題であろう。

間接的なフィルムによる影像画面であるが，12項目のカテゴリーの形容詞群によって得られたデーターをHITACH BMD08M FACTOR ANALYSISによって解析を行った。その因子分析による因子負荷量行列が表－4である。

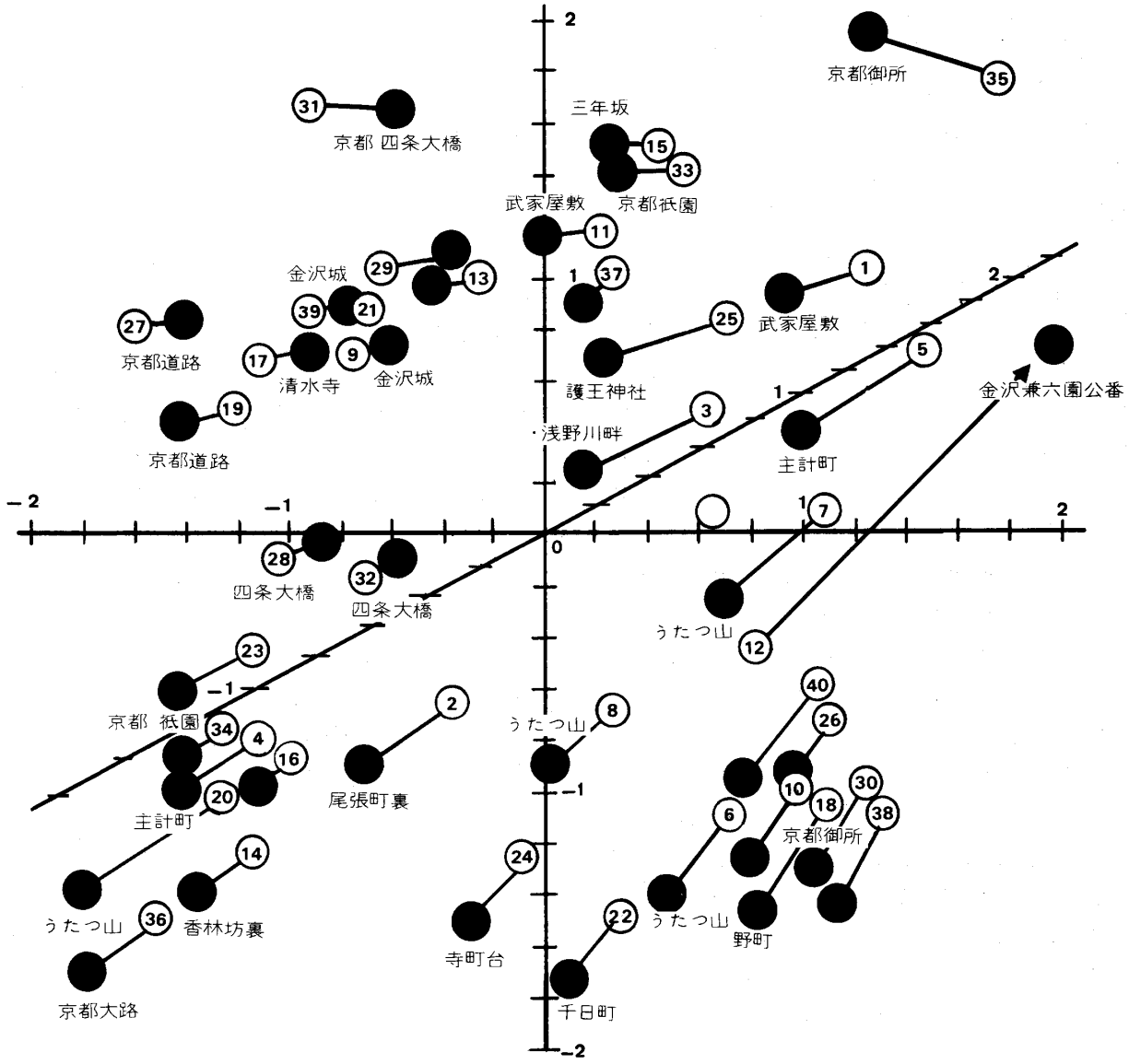
III　結果の分析及び考察

III－1　変数間の仮説

表－4，図－3に見られるように，「洗練され

表－5　因子得点行列

1	金沢　長町武家屋敷通り	1.025	1.254	−0.239
2	金沢　尾張町裏通り	−0.654	−0.379	−0.138
3	金沢　浅野川畔	0.502	0.668	−0.259
4	金沢　橋場町バスストップ	−0.874	−1.129	−0.135
5	金沢　主計町	0.723	1.471	−0.318
6	金沢　うたつ山見て歩きコース	−1.095	0.756	−0.379
7	金沢　うたつ山見て歩きコース	0.003	1.077	−0.342
8	金沢　うたつ山見て歩きコース	−0.690	0.264	−0.209
9	金沢　兼六公園入口より城を望む	0.725	−0.788	0.042
10	金沢　尾山町裏通り	−1.008	0.970	−0.279
11	金沢　長町武家屋敷通り	1.188	0.223	−0.101
12	金沢　兼六公園下交番	−0.543	0.819	6.080
13	金沢　中央見て歩きコース	1.000	−0.139	−0.025
14	金沢　片町香林坊	−1.230	−1.375	−0.125
15	京都　清水寺近く三年坂	1.472	0.433	−0.132
16	金沢　中央見て歩きコース高岡町	−0.976	−1.067	−0.081
17	京都　清水寺	0.682	−1.312	0.107
18	金沢　寺町コース野町	−1.014	1.089	−0.402
19	京都　御所の近く	0.528	−1.220	−0.116
20	金沢　うたつ山見て歩きコース	−0.964	1.115	−0.416
21	京都　南禅寺の近く	0.835	−0.582	−0.089
22	金沢　寺町台千日町	−1.517	0.297	−0.257
23	京都　祇園	−0.452	−1.156	−0.065
24	金沢　寺町台コース	−1.235	−0.086	−0.042
25	京都　御所の近く護王神社	0.859	0.742	−0.243
26	金沢　寺町台コース	−0.739	1.123	−0.326
27	京都　御所近くの通り	0.814	−1.625	0.041
28	京都　四条大橋	−0.014	−1.074	0.049
29	京都　京都タワー遠望	1.019	−0.641	0.137
30	京都　御所の近く	−0.951	1.041	−0.340
31	京都　四条大橋	1.676	−0.944	0.125
32	京都　四条大橋	−0.197	−0.712	0.063
33	京都　祇園	1.420	0.530	−0.178
34	金沢　寺町台コース	−0.755	−1.034	−0.049
35	京都　東大路道路	1.774	1.714	−0.320
36	京都　東大路道路	−1.580	−1.504	−0.020
37	金沢　小立野より本多町へ降る坂	1.095	−0.032	−0.055
38	金沢　うたつ山見て歩きコース	−1.022	1.222	−0.335
39	金沢　兼六公園より城を望む	0.690	−0.905	0.179
40	金沢　うたつ山見て歩きコース	−0.610	1.117	−0.414



図－4　因子得点の空間配置

註1　「景観要因の美学的考察1・2」金沢美術工芸大学学報27号及び28号　黒川威人，藤浦鋭夫，山岸政雄，服部光彦

註2　Semantic Differential法．C．E．Osgoodが開発した感覚を量的に把握する方法

註3　なぜ直交しなければならぬかについては，必ずしも直角でなくてもよいとする考えもあるが，それぞれの因子間には相関関係がないとする立場から直角とするのが一般である。

表－5　因子得点の大小比較

	大きいもの			小さいもの	
35	京都　御所	1.77	36	京都 東大路道路	−1.58
31	京都　四条大橋	1.67	22	金沢 千日町道路	−1.51
15	京都　三年坂	1.47	14	金沢 香林坊裏	−1.23
33	京都　祇園	1.42	24	金沢 寺町台道路	−1.23
37	金沢　本多町への坂	1.09	6	うたつ山ろく道路	−1.09
11	金沢　武家屋敷通り	1.18	38	〃	−1.02
1	金沢　〃	1.02	18	金沢 野町裏通り	−1.01

	大きいもの			小さいもの	
5	金沢 浅野川主計町	1.47	27	京都 御所近くの並木	−1.62
38	うたつ山ろく道路	1.22	36	京都 東大路道路	−1.50
1	金沢 武家屋敷通り	1.25	14	金沢 香林坊裏	−1.37
20	金沢 うたつ山ろく裏	1.11	17	京都 清水寺	−1.31

た」,「整理された」,「落つき」に1方の極を持ち,「静かさ」,「空間的のびのびした」,「開放された安らぎ」,に他の極を持った第一因子軸に「情緒的感覚的特性」を上げることができる。これは人工物,緑の量など,空間的な構造の美的規制に関するものであると解釈することが出来る。この因子の寄与率は56.5%で,全体を占める因子に対する比率が,半分以上であることを示している。第二因子には「変化」「にぎやか」などで代表される「物理的活動特性」が考えられる。この場合の,全体の因子に対する比率は16.8%で,第一因子のそれと比較して⅓以下である。第二因子までの全分散に対する累積寄与率は,70%以上となり,これ以降の因子の抽出は,心理学的解釈の上から無意味と考えられる。然し第三因子のカテゴリー別の値は零に近く,相関関係はほとんど考えられない中で,「新しい－古い」に関する因子だけが,突出して大きい値を示している。それで特に第三因子として「歴史的様式」に関する特性として取り上げた。この第一,第二,第三因子をそれぞれ直交[註3]させ,空間に配置し理解しやすくした。(図－3)

Ⅲ－2　因子得点

この因子得点は,資料として用意した40枚のスライドフィルムによる景観が,抽出された因子に対して,どの程度強く働いているかを示すものであり,これによって,具体的水準でもって因子の性質を考えることが出来る。

第一因子得点の大小による比較

表－5により,第一因子得点の大きいものと小さいものを選ぶと表－6(1)となる。京都御所の広々とした広場を前に,建造物を背景とした簡素な画面構成(35)が最も高い値を示している。また四条大橋上から見た鴨川(31)の,遠くまで見通しのきく広々とした単純な構図,次に京都の三年坂を下から見上げた時の坂の広さと道路横の塀によって構成された画面(15)が高い値として代表的である。

因子の小さいものでは,京都東大路の繁華街(36)多くの車と看板,家並が雑然としていて,路側の電柱が画面を貫いているもの。次に金沢千日町の道路(22)小さな広場があり小路が左右に分かれていて,正面にスナックやその看板・交通標式や車が目立つ画面である。以上第一因子では,「広々とした眺望のよさと,人工的構造物のシンプルさに対する評価」であると考えられる。

第二因子得点の大小による比較

第二因子で値の大きいものは,金沢の元遊郭で(5),今でもその面影が残っている場所である。家並の前の道路をはさんで浅野川が流れている。歩行者専用の橋があり,その背景には,春夏であれば緑が鮮かであろうと思われる桜並木が見える。次に金沢市の旧武家屋敷土塀の上から,常緑樹の緑が覆いかぶさっていて道路はすっきりしている。

反対に小さいものでは,京都御所の近く(27)プラタナスと思われる並木が,葉が落ちて小枝がむき出しになっているもの。並木自身は画面構成上では階層的役割を果たしているが,手前の太い電柱と交通標識は,目立ちすぎる。ここでは「緑量」に対する特性が感じとれる。

Ⅳ　まとめ

景観に対するカテゴリー別因子負荷量によって,第一因子として,「情緒感覚特性」を抽出し,人工物・緑などの空間的構造の美的規制に関する問題であると推定することができる。第二に「物理的活動因子」を,都市が抱えている生活的活動場面であるとし,第三には新しい古いに代表される「歴史的様式」に関する因子であると推定した。

またそれぞれの景観の因子得点から,第一に「眺望と人工構造物の簡素さに対する評価」を,第二には単純ではあるが,豊富な内容を持つ「緑の自然」への願望をあげることができる。

参考文献

○景観要因の美学的考察　1・2黒川威人,藤浦鋭夫,山岸政雄,服部光彦
○道路景観　国際交通安全学会
○因子分析法　安本美典　他1名
○機器に見る色彩イメージの数量化解析　山本敏子　他2名